

【会議日時及び場所】 日時 2026年6月26日（金）10時～11時55分 場所 町田市庁舎 10階 会議室10-1（リモートによる実施）	
（出席者）（敬称略） ■委員 関司直也（委員長）、寺田徹（副委員長）、柏木千春、滝口進、木目田典子 ■事務局 経済観光部 粕川北部・農政担当部長 経済観光部農業振興課 牛腸課長、武田統括係長、秋山里山担当係長、小島主任、渥美主事 ■傍聴者 0人	
【資料】 ・ 次第 ・ 資料1 2026年度第1回町田市里山環境活用保全計画推進委員会 説明資料 ・ 資料2 事業評価シート	
【議事要旨】 「町田市里山環境活用保全計画」後期実行計画について ・ 前期実行計画の評価 ・ 後期実行計画の考え方	
1 開会挨拶 ・ 経済観光部北部・農政担当部長からあいさつ	
2 議事 1. 前期実行計画の評価 事務局から資料1、2を基に説明	
・ 委員	林野庁も広葉樹利活用の取り組みを最近加速的に進めている。おそらく都市近郊で広葉樹の利活用に取り組むような自治体はそう多くないはずで、大体は中山間とか森林資源が多いところになる。ぜひ積極的に町田市からも都市近郊のモデルケースとして発信していくと良いと思う。 町田市は都市部の資源を使った公有地の活用という形でやってきており、山林の大規模な広葉樹活用や産業がしっかりあるところの活用とは違う形のモデルが求められる。さらに都市近郊の里山を組み合わせるスケールアップして、市民参加や企業参加を推進していくような、マルチステークホルダーのモデルみたいなものを、ぜひ積極的に林野庁に向けても提案し、しっかり情報共有しながら積極的に関与されていくと良いのかなと思った。例えば専門家に町田の里山を見ていただいて、率直に都市近郊ではこういうことができそうだったということを現場でアドバイスいただくことも有効。国としてもし

	っかり予算をつけて情報提供しながら色んなネットワークをこれから構築していくという動きが丁度始まった段階なので、最初から関与されて進めていくと良い。 林野庁の広葉樹利活用シンポジウムでは材の価格が結構上がっているという話も出ていた。量で勝負するわけではないが、もし資源をちゃんと評価してある程度の搬出体制が作れたら、都市近郊ならではお金の稼ぎ方というのも見えてくるような可能性を感じる。この辺りについて事務局の意見も伺いたい。
・ 事務局	林野庁の取り組み状況は我々も情報をキャッチしており、職員もシンポジウムに参加した。 町田市における都市林業の可能性については今後も検討を進めていきたい。ただし木材として活用できるほど木の量は町田の里山にはない。だが里山の資源を循環させるためには大きくなった木を一旦伐る必要がある。その中で町田の里山で伐られた木に付加価値を生み、買ってもらえるようなことを考えていく必要はあると考えている。将来的には、かつての里山のあり方の様に30年位のサイクルで木を伐って循環させていくようなスタイルができれば良いと思っている。 育ちすぎて大きくなってしまった木をどうにかしなくてはいけないという課題に対し、企業参入など「里山で稼ぐ」側面も持ちながら食欲に攻めていきたいと考えている。その辺りが里山環境活用保全計画の後期実行計画の一つのテーマになっていくのではないかと思う。
・ 委員	この議論は後期実行計画のあり方に繋がる所だと思う。里山から出てきた木材を市場化してきちんと経済性を回復させていく、あるいは新しく作っていくということに加えて、都市近郊林なので、それだけではなくて様々な価値を組み合わせることに町田のモデルがあると感じている。資料中にもあるJ-クレジット等の活用により、企業が排出権を購入しやすいようにする。それから生物多様性、これは鉄道事業者含めて開発系の事業者が興味を持っている分野で、事業者が里山に関与するきっかけにもなると思う。これまで市民団体等が取り組んできた里山の保全活動と組み合わせるような形で、都市近郊ならではの価値の出し方を分かりやすい形でモデルにできると良い。関連して、資料の中では市民団体等による里山の取り組みについて、前期実行計画期間内でかなり実績もあるように報告を受けているが、後期実行計画ではそれ以外の価値を突き詰めていくことがチャレンジの一つになると感じている。
・ 委員	今回、実行計画があったことによって一体的な取り組みを継続的に行え、その進捗を見ることができたのは、非常に大きな成果だったと思う。後期実行計画に繋がることとしては、重点事業の総合評価について、その評価をする上で果たして達成指標として挙げているものが事業評価を行う上で適切なのかどうか、考え直した方が良いかなと改め

	て思った。資料 1 にある「活動の可視化」は非常に分かりやすく面白いなと思った。エリアごとに少しずつ取り組みが進んでいる所もある一方でなかなかうまく進まない所もあるように、色がだんだん出てきたのかなと思う。取り組みが進んでいるエリアの特徴やなかなか取り組みが進まない理由、何を資源として得られればより取り組みが加速化するのか感覚的に分かれば教えてほしい。
・ 委員長	KPI 設定の再検討の必要性や、エリアごとの進捗の差をどのように見ていくかということかと思う。先ほど、三輪エリアについては、話し合いは進んだけども、体制構築にはハードルありという話もあったので、その辺りも含めて後期に向けて事務局から補足いただきたい。
・ 事務局	重点事業について、指標と取り組み内容の関係性が評価に繋がっているのか分からないというご指摘をいただいた。例えば重点事業 3 「まちだの里山」の戦略的な情報発信」では達成指標として里山の来訪者数を設定しているが、市のホームページへの情報掲載、イベント実施といった取り組みの来訪者数への影響が分かりにくい。ご指摘いただいたとおり後期実行計画で指標設定を大きく変えるのではなく、指標と取り組みの中間になる視点を挟む等といったことが、次は必要なのかもしれないと考えている。 エリアごとの取り組みの濃淡について、本計画の前身である「町田市北部丘陵活性化計画」では北部丘陵にある市有地の活用・保全を考える計画としていた。「町田市里山環境活用保全計画」になってから里山の活用を検討するにあたって、当課が所管する土地だと活用しやすいという側面があり、市有地で協定を結ばれた方々との連携実績が多くなっていた。その結果、市有地のある小山田・小野路エリアの実績が増やせたのではないかと考えている。 一方で、三輪エリア・相原エリアについては、農業振興課として持っている土地がなく、そのため小山田・小野路エリアと同じようなアプローチが難しかったというのも課題や評価に繋がったと考える。ただし市有地の有無に関わらず、各エリアには学校や指定管理者、市民団体等、地域で頑張っている方々が沢山いらっしゃる。市として、そのポテンシャルを上手く見つけられなかった、あるいは活かしきれなかった所は反省点である。例えばエリア内の学校法人など、地域の方々とお話も重ねてきたが、次に何をしようかといったステップアップが上手く進められなかった。後期実行計画では過去にコンタクトを取った方々とも、次にどのようなコミュニケーションをとっていけるのかを練っていく段階になると思っている。

・ 事務局	取り組みがうまくいった所、うまくいかない所の比較と、何があれば取り組みが進むのかについて。感覚的な話にはなるが、計画に掲げる4エリアを見ると、小野路エリアが一番取り組みが進んでいると感じる。小野路エリアは本計画を作る前からまちづくりが進んでる感じはあったが、小野路宿里山交流館のように人が集まる拠点となる場所があること、地域を広域的な視点で見れて、みんなの中心として調整してもらえるキーマンや組織があることがポイントなのかもしれない。 比べて小山田エリアは活動に取り組む方々はいるが、拠点として人が集まるような場所がなく、エリアとして繋がってない。 相原エリアだと拠点となるような場所として、相原中央公園・Nature Factory 東京町田、三輪エリアなら三輪のビジターセンターがある。それぞれを拠点に指定管理者や団体が単独で活動をしているが、活動を繋いでいくような役割を担う存在が今のところまだいない状況。エリアマネジメントのような仕組みや仕掛けを考えていくと、各エリアの取り組みが進むのではないかと考えている。
・ 委員	その仮説に基づいて、特に重点エリアは後期実行計画でも進めていかれたら良いと思う。学校法人玉川学園の取り組みがあったように、若い力というのはすごく期待が持てる。進まないものがあれば学生のような方々も巻き込みながら、面白いモデルと一緒にやっていくと活動にも新しい風が入って取り組みが活発化されるのではないかと期待が持てる。
・ 委員	前期実行計画の評価内容について、メンマづくりの取り組みに企業が絡んでやられていたのが良かったと思う。 また、里山の来訪者が昨年度実績だと34,000人位いたということだが、単純に1日に100人位来ていることになる。里山に行くまでのバス等といった交通利便性を考えると、かなりの人数の方が里山に来ているのだと改めて感じた。ここに企業が絡む、ビジネスのポイントになる要素が隠れているのではないかとと思うので、焦点を当てても面白いのではないかな。
・ 事務局	メンマの取り組みについては2つの団体が市内では取り組んでいる。もともとは宮崎県延岡市の企業と連携しながら始めたものだが、最終的には地域の企業とできればいいなと思っている。1団体の取り組みについては市内の漬物屋さんとの連携も見据えてい

	る。もう1つの団体では作ったメンマを学校の給食に提供しており、企業連携の取り組みについても少しずつ芽が出てきたのではないかと感じている。
・ 委員長	その都市近郊ならではの連携スタイルについては前期実行計画ではそこまで踏み込みきれなかったところがあるので、後期実行計画の特徴的な動きとしてしっかり入れ込んでおくの良いかと思った。
・ 委員	取り組みの情報発信に関して素晴らしいと思った。いつも仕事で60～80代位の方々を連れて歩くことがあるが、参加される方々は里山の価値をととても感じている様子である。 重点事業3の指標には来訪者数を掲げているが、里山へ継続的に関わる人の目線も持てると良いと思った。
・ 委員長	リピーターの存在をもう少し捉えても良いのではないかとのご提案だったが、事務局はどう考えているか。
・ 事務局	本計画を作った時に根底にあったのが、里山に関わる人が圧倒的に少ないため関わる人を増やしていきたいという思いだった。●●委員がおっしゃったとおり、ただ里山に来ている人の数だけではなく、実際に里山づくりに関わっている人がどう増えていくのかを抑えていく必要があると思っている。調査によって動向を把握できると良いが、市民アンケートやネット調査など、町田市内の里山づくりに関わったことがある人の割合みたいなことを出すイメージである。データとの取り方などは事務局の中でも検討していきたいと思っている。
・ 委員長	まず1点目は、●●委員からもあったように里山として一体的な計画がまとめられたという点は、私もすごく評価すべきところであると思っている。町田市北部丘陵活性化計画の頃はどちらかというと地域住民の皆さん主体でどうするか、あるいは市有地をどうするかというところに視点を置かざるを得なかった。先ほどの事務局回答のように、その外側での関わりようの議論が進めづらかったと思うが、町田市里山環境活用保全計画として看板をかけ替えたことの意味合いみたいなところをより意識的に捉えたほうが良いと思った。 2点目は●●委員からの話とも関わるが、重点事業2である担い手の発掘や育成につ

いて。確かに担い手は増えてきているが、なかなか人数は伸びづらい。担い手になり得る人材はいきなり登場するわけではないが、里山関係人口みたいな視点で捉えられないか。例えば農村における関係人口の場合では、関心と関与で2軸を取っている。「関心」は情報発信みたいな視点がまず重点になり、「関与」は実際に実行されるプログラムになっていくと思うが、その関心と関与の2軸で取り組みをステップアップしていくということが他事例では結構描かれている。

里山だと、まずはテレビ番組等メディアで取り上げられることをきっかけに里山へアクションしてもらおう。その後に●●委員が言われるように、リピーター等といったかたちで里山と関わりを深めてもらう。関わり方のステップアップのデザインを考える時に、今始まりかけている取り組みがどこに位置づいているのか整理できる段階になってきたかなという印象を持った。計画を作った時は手探りだったところもあったが、里山へのアクションが進んできたり、取り組まれてる主体も少しずつ増えてきたりしているので、その情報や状況を分かりやすいフォームで一元化できると良いのではないかな。

3点目、町田市北部丘陵活性化計画が運用されていた頃の論点に、小野路エリアの市有地の里山に手が入らないために不法投棄等が発生し、生活環境に対する里山のマイナス面がかなり出ていることが挙がっていた。町田市里山環境活用保全計画ができて、色々な里山で皆さんに活動していただいたことでそのマイナス面が改善されてきているのではないかな。外部経済効果みたいなものではあるが、里山への関わりを入れていくことによって、周辺に暮らしている方々の「住まい方」みたいな部分にプラスの面が出ているとすればかなり大事な評価点になってくと思う。

・ 事務局

1点目は、里山の計画には意味があるという、ありがたいお話だった。ありがとうございました。以前の計画である町田市北部丘陵活性化計画はどうしてもハード整備が進まず、やりたいことができなかったという経験があったので、思い切ってソフト中心に仕立てたのが町田市里山環境活用保全計画だった。ソフト的にできることをやっていこうという雰囲気に大分なってきたことは良かったと思っている。

2点目、担い手・関係人口について。関心から関与というお話をいただいた。町田市里山環境活用保全計画には4つの基本方針があり、「関心」は方針3の「里山を体感する」、「関与」は方針4の「里山ではじめる」ということだと思っている。この基本方針はステップアップしていくイメージの内容なので、後期実行計画もこの方針に沿って重点事業や取り組みを整理していくと分かりやすいと事務局でも話している。

3点目、不法投棄や生活環境の悪化に対して町田市里山環境活用保全計画では町内会

	と連携し、里山クリーンアップキャンペーンとフットパスツアーみたいなことをやり、市有地を地域の団体と一緒に整備を進めたりしてきた。やっていると市有地隣接地の地主さんからも「うちもやってくれないかな」といった話があったりして、少しずつ里山が綺麗になっている。それが恐らく動物も含めた里山の生態系へ良い方向で作用しているのではないかなと思っている。その様な取り組みが他のエリアでも広がっていけるようなことが、後期実行計画では展開できたらと考えている。
・ 委員長	3点目の話は非常に良い話で、最初は公有地の扱いをどうしようかと取り組んでいたことが、民有地の地主さんにも関心を寄せてもらえるようになった。公有地だけではカバーしきれない民有地の里山に対するアプローチは今後少なからず必要になる作業で、後期実行計画の焦点になるのではないかな。
2. 後期実行計画の考え方 事務局から資料1を基に説明	
・ 委員	まず前期実行計画、後期実行計画は全く別の計画ではなくひと続きの計画なので、どういう部分を継承し、アップデートするのか。計画のフレームとして何を継承していくかの整理が必要だと感じた。 前期実行計画の達成状況が良いので、さらに進んでいこうというポジティブな意味で、アップデートしていくべき内容は多いのかなと感じる。事務局説明では重点事業やリーディングプロジェクトの必要性を再検討するとあったが、リーディングプロジェクトは地域ごとの目標を立てているのでそれごとくしてしまうと、前期実行計画と後期実行計画の連続性が分からなくなる。完了できたものは終わりにする、必要なリーディングプロジェクトは残す等といった判断はあっても良いが、リーディングプロジェクトとしてのフレーム自体は大きく見直さなくて良いのではないかな。 説明にあった戦略的な部分は、アップデートしていく部分であり、将来のあるべき姿をもう少し具体化し、方向性を定めてプランを立て、実施するという流れを作ることは後期実行計画において非常に大事な部分だと思う。 都市近郊の里山代表のような形で町田市を捉え、そのための里山経営モデルを作るんだ、というような感じのゴール設定ができると良い。リーディングプロジェクトはそのゴールに向かって組み立てていく。今回新たに説明のあった戦略も都市近郊の里山経営モデルに向けた戦略ということになるので、目的もはっきりする。 知る限りでは、しっかりした里山経営モデルというものを出しているような組織・団体はない。クラフトメンマによる地域活性化の取り組み等含めてメディアの関心も高く、オリジナリティも出せる部分であり、社会に対するインパクトもあるのではないかな。 前期実行計画の説明で、地図に里山の保全・活用活動をマッピングしていたが、これがすごく大事だと思う。こういった活動をきちんとマッピングし、リアルタイムで更新して、さらに公開していくことが大事ではないかな。KPIで活動団体の数を示すことは事業評

価値としては重要だが、市民への取り組みアピールや情報提供、進捗状況の報告といった目的で、これだけの活動が展開されていることを視覚的に理解し、知ってもらうことは、個人情報の扱い等はあるかもしれないが、積極的に進めていくべき内容ではないかと感じた。

・ 委員

30 年先を見据えた里山経営という考え方は、私も賛成している。また、作業イメージの説明にあった「誰が読んでもわかりやすい」ということも重要だと思っている。

その観点で、リーディングプロジェクトや重点事業の扱いに関しては、名前を見直してみてもどうか。リーディングプロジェクトは先導的・重点的な事業と意味だと思うが、書かれてる内容はエリア別のプロジェクトとリーディングプロジェクトの二つで構成されている。リーディングプロジェクトの内容を重点事業に昇格してはどうかという話もあったが、リーディングプロジェクトなのか、エリア別プロジェクトなのかといったように枠組みをもう一度見直して整理してはどうかと思った。

後期実行計画の考え方については、「戦略」を 3 分類に分けて説明している。戦略の名前は誰が読んでも同じような行動パターンや行動イメージができないとあまりよろしくない。今回の名前は仮置きだと思うが、例えば戦略 1 の「マーケット戦略」について、これは一般的な市場戦略を指しているわけではない。共感や参画を広げるような戦略が実際には書かれている。もう少しそれを市民に分かりやすく、加えて里山らしい用語にするなら何がいいかなと考えた時に、例えば「始める・支える・場づくり戦略」といった、誰かが何かを始めようとか、その活動をみんなで支えて里山を作っていこうといったネーミングの方が分かりやすい。

戦略 2 の「経済循環戦略」も、名前だけ見るとお金の循環を意識しているのかと思うが、実際に見るとそれだけではなくて、品質や投資、品質管理のようなことも書かれている。なので名前を「稼いで守る」とか、シンプルな名前の方が分かりやすいのではないかな。

戦略 3 「サービス戦略」については、「学び楽しむ戦略」あるいは活かす・生かされる戦略など、資源活用の話と、資源活用しつつ私たちも生かされるようなイメージで考えるとより分かりやすさが際立っていくのではないかなと思う。

・ 委員

前回の委員会でも話したかもしれないが、どうやって里山と企業が関われるかを考えたときに、やはり地元企業の地域貢献があると思っている。企業も人材不足といった課題を抱えており、広告・広報を強化して良い企業だということを見せたいというニーズがあると思う。CSR などの地域貢献をしている企業もあるが、里山に関わる取り組みに対して例えば町田市として表彰や認定する制度を設けてみるのはどうか。SDGs に取り組む企業に対して、行政が SDGs 認定企業として認定して行政のホームページに掲載するなどといった取り組みがあったので、その様な表彰制度や認定制度があると関わりたいという企業も出てくるのではないかなと思った。

もう 1 つとして、我々の取り組みで新しいサービスをやろうとする企業を対象とした

テストマーケティングということをしている。自社のサービスを体験してもらい、色々なご意見をいただくという取り組みだが、それをより大きな視点で考え、町田の里山を使った実証実験ができるフィールドといったものに活用できないかなと思った。例えば最近ではAIを活用したサービスやアプリ開発といった企業が多くなってきている。里山を使ったコンシェルジュサービスや、樹木や竹林の写真によるAI診断等、そういう業界の方からすると、里山には様々な活用方法がいっぱい眠っているのではないかなと思う。里山に人が沢山来ている中で、里山を紹介するマップアプリや予約サービスなどといったものが私自身でも思いつくので、事業者から見ればもっと色々な魅力あるものがいっぱい眠ってるのではないかな。

神奈川県企業が東京、町田でも事業をやりたいという話も多いので、東京だけではなく他県からの企業も集まるのではないかなと思っている。先ほど話した認定制度やこの実証実験を絡めて回していくと相乗効果が期待できるのではないかなと考える。

・委員長

後半の話は地域課題や社会課題そのものを資源としてアピールしながら、参画してもらって主体を広げていくという発想のお話しだった。今までは市民ベースの取り組みが多かったが、企業の活躍の余地もあるのではないかなというご提案である。

・委員

後期実行計画ということで、保全活動そのものを目的とするだけではなく、保全に参加したくなるような仕組みや、里山と体験プログラムを一体化させることで、関係人口を増やす視点を持って活動することも重要ではないかな。

先ほど●●委員がおっしゃっていたように、AIを使ったサービスの導入は重要な視点だと思った。

・委員長

先ほども少し議論になったが、30年なり大局的に見た時に、おそらく里山の所有から利活用という大きな流れに変わると思われる。今までは土地の所有者が里山の維持管理もしないといけないし、利活用もしないといけない。利活用してお金が入ってきたので管理もちゃんと行われていたというサイクルだったと思うが、その主体がずれてきている中で、特に市有地に関しては利活用の主体などを役割分担しながらどのように繋がりを持ち、保全と利活用をしていくのかという話になる。主戦場は民有地だと思うが、その動きが、市有地で色々広がりが出てきているということが、今後の流れとしてすごく大事になってくるのだと思う。そうなった時に、民有地の利活用はやはり地主や所有者の意向をしっかりと捉えていかないと、そもそも土地を使わせてくれるのかということ自体からが入り口になってしまう。ここはかなり意識的に、後期実行計画から少しトライアルを始めて、次期の計画へ橋渡しするということを始めてもいいのかなと思った。これはまた事務局、委員の皆様と色々議論をさせていただければと思う。

もう一つは●●委員からも非常に大事とお話をいただいたことだが、先ほどの話とモデルケースの分析や事例集的な表現をしていくことがリンクするのだと私も思う。先ほども都市近郊の里山のオリジナリティといった話を●●委員からもいただいたが、今回も改めて考えれば、この委員会のような場に●●委員や●●委員のような立場の皆様にも一緒に議論へ参画してもらえること自体が、おそらく里山に関する委員会としてはかなりイレギュラーであまりないものだと私は思っている。観光や企業の動きも当然リンクするよねという考え方のもとに動いている、町田市のスタンス自体がかなり特徴的で、ある意味で町田市というところを体現しているのだとも思う。

今動いている事例の中で、ステークホルダーがどう連携し、どのようなプロセスを辿りながら活動を進め、お金を回していくのか、あるいは資源を循環する段階まで到達しているのか。その動きを分析して絵やストーリーのかたちで示すといった発信を行う。前期実行計画はこれまでの蓄積もあり、ここまで取り組みを拾えてきたことを今回示せたのは大きな成果だと思う。それを町田市の中で横展開できるものもある一方、エリアによっては少し特徴付けしながらアレンジして取り組まないといけないところもある。

次期の計画で本格的に入れるような内容のトライアルについては、事務局が先ほど提示していたリーディングプロジェクト、重点事業等を現状整理し、後期実行計画でチューニングするところと、次期の計画で取り組むべきところの議論をまた行いたい。

・ 委員

説明資料にあった学生からの提案や、委員の皆さんからも出た里山と AI といったこれまでにない組み合わせのご意見をいただいて、町田市の里山経営を考えるために、色々な活用のあり方や可能性についてざっくばらんにアイデアを出してみる場があっていいかもしれないと思った。町田市の里山は、アクセスも良く、公有地を持っていることもあって実証実験のフィールドとして考えやすい。アイデアを実施するかは別にして、これだけの可能性が里山にあるというのを示しておく作業は、里山の経営モデルを考える上で頭を柔軟にしていくために大事だと思った。

資料中にある大学生の意見の中で「看板作り」の提案があるが、ちゃんとデザインされた看板を里山の中に設けることで、市民の方から見ても、「外部に開かれた里山」であることを示すことは、ブランディングとして大事である。メンマや家具づくりなど興味持ってもらいやすい取り組みがある一方で、薪やシイタケ原木の生産といった取り組みや、東京の特産品としてどんどんやると良いと思う。あとは、民間企業も里山あるいは人の活動エリアに近い森林の体験価値に興味を持っているので、企業向けのフィールドとして空間や森林を貸し出す事業も良いと思う。一人用のキャンプスペースと

・事務局

して貸し出すコーディネート事業みたいなものもある。都市近郊で、ちょっと行けば静かな空間でキャンプできる、デジタルデトックスみたいなことができるというのは、町田だとかなりポテンシャルがあると思うので、可能性を示していくことが大事ではないか。

ありがとうございます。多岐に渡るご提案、ご提言いただき、●●委員長にまとめていただいたところを中心にお話させていただく。

まず一点目について、「30年先」という視点から、里山の所有から利活用へというお話をいただいているが、まさに我々もそういった視点で進めていきたいと思っている。かつての里山は、山を持っている人や暮らしている人が生業や生活のために必要があって山に入っていたが、これからも同じようなことができるとは全く思っていないので、色々な方々が関わっていくことをイメージしている。例えば所有している人がAさんで、そこを整備する人がBさん。整備するお金を負担する企業Cさんがいて、そこを利用するDさんがいる。それが町田市里山環境活用保全計画のキャッチフレーズである東京・町田発の「新しい里山」を作るということなのかなと思う。

●●委員からお話いただいたとおり、都市近郊の里山や森林を持っている町田としてのモデルを発信していきたいと思っている。全国の自治体の色々な里山に関する取り組みを調べているが、大概が環境系あるいは緑系の部局で所管をしている。町田市は経済関係の部局で里山を所管しているので、やはりもう一度「稼ぐ里山」、お金が循環するようなことを引き続き食欲に考えていきたいので、全国唯一、経済部門で里山を所管していると言っても良いと思っているところである。

2つ目、マップについて皆様からご意見いただいているが、あそこにはこんな活動している団体がいるというところを今回改めて説明資料でマッピングしたことで、思った以上に活動している方々がいるという気付きがあった。皆で共有し、可視化できるものは必要だと思っており、それをリアルタイムでアップデートして発信する必要性もご指摘いただいたのでぜひやってみたいと思っている。

●●委員からいただいた里山の経営について、最近は学校法人玉川学園との連携が多く、学生さんならではの面白いアイデアもご提案いただいている。頭の硬くなった私どもでは思いつかないアイデアもいただいているので、今後は学生さんや民間事業者の方々とも話をしていくようなこともやっていきたいと思っている。今年度は玉川大学と共同研究をやっていこうと思っているが、まさに産学官連携に関する内容なので持続可能な町田の里山づくりに関する様々な可能性について実証実験も絡めてやっていけたら

と思っている。

町田市における里山経営について、森林経営管理制度をフレームとして使いながら、里山経営モデルを考えるようなことを、以前も●●委員からご提案いただいておりますが、町田市の場合は首都圏近郊なのでモノで稼ぐというよりはコトを売る方が稼げるのではないかと考えている。●●委員からもご意見あったが体験プログラムとして色々なメニューを提供し、それをきっかけに参加してくれた人がリピーターとなって何らかの形で里山の担い手になってもらうことはとても可能性があるのではないかと考えているので、それを意識した町田版の里山経営モデルみたいなものを後期実行計画の検討でも考えていけたらと考えている。

本日はご意見を色々いただいているので、第2回に向けて事務局の中でも振り返りながら検討し、議論を進め、次回にまとめてご説明したい。

6. 閉会